

北海学園大学 経済学部

地域研修報告書 2008

平成20年度 私立大学教育研究高度化推進特別補助採択事業



CONTENTS

北海学園大学経済学部 ● 地域研修報告書2008 目次

1 ……『地域研修報告書』の発行にあたって

2 ……地域研修報告会

4 ……地域研修1年間の流れ・研修地一覧

5 ……特集 密着ルポ●地域研修（夕張市合同研修ほか）

7~28…地域研修ゼミ報告（2008年度 地域研修Ⅰ・Ⅱ 参加22ゼミ 計363名）

7 ……浅妻ゼミⅠ



地域公共交通の現状と課題
研修地／帯広市・豊頃町・陸別町・小清水町

8 ……浅妻ゼミⅡ



現場で学ぶ交通まちづくり
研修地／京都市・堺市・和歌山市

9 ……池田ゼミⅡ



新日鉄室蘭工場見学研修
研修地／室蘭市・登別町

10 ……内田ゼミⅠ



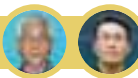
本別町における「キレイマメ」ブランド化への取り組み
研修地／本別町

11 ……奥田ゼミⅠ・Ⅱ



地域建設業の現状と課題
研修地／網走市・斜里町・丸瀬布町

12 ……河西ゼミⅠ・Ⅱ、川村ゼミⅠ



夕張における中小零細事業者の経営実態と課題
研修地／夕張市

14 ……川村ゼミⅡ



介護・介護労働をめぐる問題と課題
研修地／主として札幌市

15 ……北倉ゼミⅠ・Ⅱ



グリーンツーリズム・part 5
研修地／長沼町

16 ……小田ゼミⅠ・Ⅱ



苫小牧東部開発と周辺地域開発の諸問題
研修地／苫小牧市・日高町・平取町

17 ……佐藤（信）ゼミⅠ



めん羊を活用した地域づくり
研修地／士別市

18 ……徐ゼミⅠ・Ⅱ



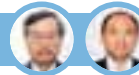
地域振興と日中経済
研修地／芦別市・千歳市

19 ……西村ゼミⅠ・Ⅱ



財政再建下における高齢者の生活と地域課題
研修地／夕張市

20 ……高原ゼミⅠ・Ⅱ、水野谷ゼミⅠ・Ⅱ



商店街活性化のための基礎調査
研修地／訓子府町

22 ……平野ゼミⅠ



札幌市内のフェアトレード商品取扱店調査
研修地／札幌市

23 ……平野ゼミⅡ



洞爺湖G8サミットの地域社会への影響
研修地／洞爺湖町・壮瞥町・豊浦町・留寿都村

24 ……古林ゼミⅠ



サケの生産・加工に関する体験学習
研修地／標津町

25 ……古林ゼミⅡ



軽種馬の生産施設における体験学習
研修地／北海道日高支庁管内

26 ……水野ゼミⅠ・Ⅱ



浅野炭鉱・昭和炭鉱の労働者の実態を学ぶ
研修地／沼田町

27 ……山田ゼミⅠ



函館の地域メディアの現状を知る
研修地／函館市

28 ……山田ゼミⅡ



沖縄の地域メディアを実体験する
研修地／糸満市・浦添市・那覇市

29 ……[Interview] 高原ゼミ・水野谷ゼミ合同地域研修現地報告会（訓子府町）



2008年度 『地域研修報告書』の発行にあたって

北海学園大学 経済学部長

小林 真之

「地域研修」が経済学部のカリキュラムの一環に位置づけられ、実施されてから今年で5年目をむかえます。当初は新しく設立された地域経済学科の独自科目として出発しましたが、昨年は経済学科にも開講されることになり、経済学部と地域社会との関わりを深める特色ある事業に発展しています。そうした実績が認められ、一昨年度から文科省の「私立大学教育研究高度化推進特別補助事業」に採択されています。

経済学部では学生が4年間で経済学の知識を体系的に学べるようにカリキュラムを作成し、講義・ゼミナールを通じて彼らが今後立ち向かうことになる社会への認識を深めるように努力しています。しかし多くの学生にとり現実の「社会」は未知の領域であり、学習する内容が身近に感ぜられないという実状があります。その意味で「地域研修」は地域で実際に活動している地方自治体、民間企業、NPOなどの諸団体の窓口を通じて地域社会・経済がかかえる現状・課題を具体的に知ることで、学生の学習意欲を高める契機となることを期待しています。

地域研修のテーマも年々多様化しており、研修先も北海道内にとどまらず、関西・沖縄など道外にまで拡大しております。その成果は12月に開催された「地域研修報告会」で学生により報告され、その概要が本報告書としてまとめられています。今後も地域研修をより一層充実させていきたいと願っています。地域研修に御協力いただきました地方自治体、各種団体の皆様には厚く御礼を申し上げます。

地域研修説明会 | 2008年4月12日 D20番教室



地域研修報告会

2008年12月6日、13日
D20番教室、34番教室



2004年度から始まったフィールドワーク型講義「地域研修」も今年で5年目を迎えました。ゼミ単位で実施される「地域研修」は、教員の指導の下、学生主体で研修テーマ・内容の決定、事前学習（対象地域の歴史・経済の下調べ、統計資料の調査、質問票の作成など）が行われ、研修の成果を履修者全員参加の「地域研修報告会」で発表します。報告会に向けてのまとめ作業を通じ、また、報告会で他のゼミの発表を聞き自らが学習した地域と比較する中で、問題意識をより明確化していくことが可能です。

本年度の「地域研修報告会」は例年同様、2日間の日程で12月6日と13日のいずれも土曜日・2講目（10：40～12：10、若干の延長あり）に開催されました。ただし、本年度の「地域研修」参加ゼミは22ゼミとなり、「地域研修」履修者数は300名を超えるという盛り上がりを見せたために、同日に2つの会場で報告会を同時並行で実施しました。

参加ゼミは報告会に先立って、研修内容をまとめた資料（A4用紙2枚分）を提出していたので、報告会当日にはすべての参加ゼミの研修内容が一覧できる「報告資料集」が全員に配布されました。この「報告資料集」に加えて、参加ゼミはプレゼンテーションソフト（パワーポイント）などを使って研修内容を大きなスクリーンに映し出しながら発表します。スクリーンには、研修の要点が示されるとともに、研修風景の写真やゼミによっては動画を流すなど、フロアにわかりやすく伝える工夫がみられ、過去に実施されてきた報告会の経験が十分に継承されていることを実感しました。また、各ゼミの発表後に、短い時間ですが、フロアとの質疑応答の時間を設けました。質問に対して適切に回答するゼミもいれば、鋭い質問に対する回答に苦労したゼミもありました。質疑応答の時間を設けることで、発表するゼミ生には大勢の学生の前で回答する難しさを経験する良い機会となり、一方で学生には質疑応答のやりとりを通して研修の内容をより深く考える機会となったようです。

「地域研修報告会」の参加ゼミ全体を見わたすと、実に様々な研修テーマが取り上げられており、訪問先は北海道内の各地ばかりか北海道以外の地域にも広がっています。また、複数のゼミが合同で研修を行ったり、地域実態調査を長期間にわたって実施したり、地域の人々と問題解決にむけてコラボレーション（協働）して調査研究に取り組んだりするゼミも出てきたりするなど、「地域研修」はより学習効果の高い内容へと変わってきています。このように充実してきた研修内容の成果を地域研修に参加したゼミ生・教員の全体で共有できる学びの場＝「報告会」づくりの工夫が今後の課題です。2つの会場で同時開催することによって全部のゼミ発表を聞くことができなくなってしまったこと、報告時間や質疑応答の時間が十分にとれないことなどが反省材料です。報告会の形式改善には引き続き取り組んでいきたいと思ひます。各ゼミの次年度でのますます研鑽を期待しております。



（地域研修担当委員 小田清・浅妻裕・水野谷武志）



地域研修 1年間の流れ

地域研修は夏休みに行われる現地研修（フィールドワーク）が中心ですが、そのためには事前の学習、研修後にその成果をレポートにまとめる作業、報告会でのプレゼンテーションまで、これまでの教室での講義・理論の要素に加え、実践的な学びが必要とされる複合的な学習です。

4月 ● 地域研修ガイダンス

地域研修担当教員から当該年度の地域研修に関するガイダンスを受けます。

5月 7月 ● 事前学習（研修テーマなどの決定）

ゼミ担当教員の指導のもと、ゼミ単位で研修対象地域の社会、経済状況などについて、関連自治体・団体などから提供された資料によって、研究対象地域の概要を勉強します。

8月 9月 ● 地域研修実施

おおむね夏休み後半から10月初旬にかけて現地研修を行います。現地研修では関連自治体・団体・企業などからのヒアリングを行い、関連施設の見学や実地見聞、実態調査などを行って研修内容を深めます。

12月 ● 地域研修報告会

地域研修の成果に基づいて報告レポートを作成し、ゼミ単位で発表を行い研修成果をゼミ相互で確認しあいます。

3月 ● 地域研修報告書の作成

地域研修報告会の発表レポートをもとに、研修の成果を報告書としてまとめます。

研修地一覧



那覇市・浦添市・糸満市

[特集] 密着ルポ●地域研修

2008年8月4日 事前学習、
2008年8月26日、27日 夕張市合同研修、
地域研修報告会準備作業、ほか

「夕張」合同地域研修PHOTOレポート



左右とも／講師を招いての事前学習スタート



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



13



●「夕張市での現地研修」をとりあげた朝日新聞の紙面（2008.8.27）

写真1／8月26日夕張市役所から現地研修スタート
写真2～4／夕張市役所で藤倉市長から挨拶と現況の説明を受ける
写真5～10／8月26日～28日の2泊3日、広い夕張市全域を調査
写真11／宿泊所で「夕張メロン」
写真12、13／宿泊所で反省会、翌日の現地調査の準備作業



写真1／宿泊所で戸別訪問調査の準備作業
 写真2／8月26日～28日の2泊3日、広い夕張市全域を調査
 写真3／夕張医療センター希望の杜を視察



写真4～8／12月6日、13日の報告会まで報告書づくりが行われた。

各ゼミ報告会プレゼンテーションへの取り組み



●各ゼミにおいても報告会に向けて様々なプレゼンテーションの準備がすすめられた。

浅妻 裕

ゼミ I

ASAZUMA Yutaka Seminar I
○参加学生数 15名

地域公共交通の現状と課題

◆ 研修地 一帯広市・豊頃町・陸別町・小清水町



浅妻 裕
経済学科
准教授

研修期間・研修先

- 9月10日 札幌出発、帯広着（移動日）
- 9月11日 エコERC視察（豊頃町）、
市役所にて自治体担当者、交通事業者等へのヒアリング
- 9月12日 陸別町商工会ヒアリング
- 9月13日 JR北海道のDMV（ディアルモードビーグル）試乗（小清水町）、帰札



りくべつ鉄道広場にて

◆ 研修目的

北海道では札幌都市圏以外、鉄道やバス路線の廃止・縮小が続いている。地方部で進む高齢化問題や環境問題の観点からは懸念される状況である。公共交通の再生に向けて、どのような選択肢があるのか、道内の先進的な取り組みを視察した。

◆ 総括

今回の調査の中心は帯広市における公共交通活性化に向けたユニークな取り組みである。帯広市は自動車への依存が極めて高い都市であることが明らかになっている。しかし高齢化が進むと、移動の手段を持たない人々が増え、暮らしが成り立たなくなる。これを憂慮し、マイカー依存からの脱却と公共交通の活性化に向けて、行政と自治体が連携して各種の取り組みを行っている。

重点的な施策としてモビリティ・マネジメントがあげられる。これ

は公共交通の利用が環境や健康に好影響をもたらすことと、公共交通の便利な利用法を伝えることで、公共交通を重視した移動へと導くコミュニケーション施策である。市内のバス事業者が小学校へのバス利用に関する出前講義を実施し、利用意図の向上が見られるなどの成果もあがっている。

また、人口密度の低いエリアでオンデマンド・タクシーの導入を進めたり、バス車内で回収した廃油を㈱エコERCでディーゼル燃料化するという循環型社会の形成と連動した取り組みを実施したりするなど、数多くの試みが行われていることがわかった。その他、JR北海道のDMV 試乗、陸別町のふるさと銀河線跡を活用した運転体験事業の調査も行い、地方部における公共交通の重要性と今後の可能性について考察することができた。

学生研修記



折内 美都
経済学科2年
倶知安高校出身

モビリティ・マネジメントと公共交通

どの地域でのヒアリングも興味深いものでしたが、特に印象に残った帯広市役所では、公共交通の現状について学びました。帯広市は北海道の中でも進んだ政策をとっており、なかでもモビリティ・マネジメントという政策では小学生を対象に交通とCO2の関係などの情報を提供し、知識を子どもの頃から深めていくなどの取り組みを行っています。日本は環境教育が進んでいないと感じることが多かったのですが、このような取り組みによって環境と交通の現状を知り、公共交通の利用が広がっていくのではないかと思います。また小清水町ではDMVの乗車体験をしました。まだまだ改善していかなければならないことはたくさんあるようですが、地域交通の維持に欠かせない交通手段になると思いました。今回の研修では反省する点もありましたが、来年に生かしたいと思えます。



帯広市役所でのヒアリング



陸別町ヒアリングを前にした予行演習



廃線となった陸別駅施設の説明を受ける



陸別駅構内を背景に



陸別町商工会ヒアリング



反省会の様子



最終日、コテージでの朝食



JR北海道乗務員と記念撮影

公共交通の維持・発展のための活性化策を検討する



松本 拓土
経済学科2年
帯広大谷高校出身

今回訪問した中で、印象に残ったのは豊頃町の㈱エコERC工場における廃油を利用したバイオエタノールの製法とその将来性についての学習、そして網走で試乗した線路と道路の両方を走行できるDMVです。いずれも環境に優しい手段として将来性が期待されているためです。また、帯広市では公共交通のこれまでと現状、全国で6箇所環境モデル都市の一つに選ばれたことによって今後の取り組みにどのようなよい影響がでてくるのかを学びました。さらに、陸別町商工会では鉄道廃線跡を活用した運転体験による地域活性化に向けた取組について学習しました。

この研修では、現地の生の声を聞くことで充実した内容となりました。公共交通を維持・発展させるために、どのような活性化対策が必要なのかを考えるよい機会となりました。

浅妻 裕 ゼミⅡ

ASAZUMA Yutaka Seminar II
○参加学生数 16名

現場で学ぶ交通まちづくり

◆ 研修地—京都市・堺市・和歌山市



浅妻 裕
経済学科
准教授

研修期間・研修先

9月24日 KOALA (交通まちづくりのNPO) とのディスカッション (京都大学)、KOALAとの懇親会
9月25日 醍醐コミュニティバス市民の会 (京都市伏見区) ヒアリング、コミュニティバスの試乗
9月26日 さかいLRT 研究交流センター、和歌山電鉄の調査、わかやま小町 (まちづくりNPO) ヒアリング
9月13日 帰札



醍醐コミュニティバスヒアリング会場にて

◆ 研修目的

現在、都市の大気汚染問題、都市の空洞化問題、高齢化問題などを背景として公共交通の再編を通じたまちづくりが模索されている。関西ではこの取り組みが活発に行われているため、現地を訪問しヒアリング調査などを行った。

◆ 総括

今回の研修成果は3点にまとめられる。

一点目は現場で公共交通まちづくりに取り組む人たちの熱意である。地域住民の活動や交通事業者・自治体の創意工夫を通じて、公共交通の存続や再生が実現する。例えば2004年に運行を開始した醍醐コミュニティバスは、バス路線空白地帯の住民たちが100回以上の説明会を重ね実現した。結果として地域ニーズの掘り起こしにも成功し、全国でも稀有な成功事例として知られるまでになった。

二点目は公共交通を支える制度についてである。日本では公共交通は独立採算が原則とされてきた。しかし、KOALAからの報告によれば、ドイツのフライブルクでは、公共交通の外部効果を理由として運営費の7割を行政からの補助によっている。日本でも道路財源を公共交通に振り向けていくなど、抜本的改革の必要があることを学んだ。

三点目は公共交通まちづくりにおける大学や研究者の役割についてである。例えば、和歌山電鉄のケースでは、地元大学の学生や研究者が、廃止が計画されていた路線について、路線存続と廃止の場合の費用対効果分析を行い、存続が望ましいと結論づけたことが路線維持の原動力となった。

学生研修記



増井 啓太

地域経済学科3年
札幌西高校出身

まちづくりにおける公共交通の役割

今回、私たち浅妻ゼミⅡでは、住みよい街づくりのために交通機関が重要な役割を担っている地域を調査しました。研修に行った地域の中でその役割の重要性を特に肌で感じることができたのが、京都の醍醐コミュニティバスと和歌山電鉄貴志川線です。

2つの交通機関に共通していることは、いずれも地域住民の方々が中心となっている点です。その背景には、バス路線削減に伴う住民の足の確保の必要性、廃線によって失われる住民の足の維持という目的がありますが、その目的を達成するために多くの企業や個人が財政的な援助をしている所に、地域住民の交通機関の必要性の高さがみとれます。さらに、これらの交通機関の利用者の中に高齢者や学生が多くいるということからも、毎日継続して利用される交通機関の果たす役割の重要性を確認することができました。



ヒアリングの様子 (京都大学)



KOALA池田氏からの説明を聞く



ヒアリング先へ向かう (堺市)



KOALAの皆さんと記念撮影



さかいLRT研究交流センターにて



和歌山電鉄名物のたま駅長



おもちゃ電車前にて (和歌山駅)



担当講師から説明を受ける



佐藤 友佳

経済学科3年
恵庭北高校出身

コミュニティバスと市民活動

ヒアリングを行った醍醐コミュニティバスは行政の補助を受けずに市民の手で実現させた新しいバスシステムとして全国各地から注目されています。地域全体が一丸となったことが、醍醐コミュニティバスの成功した要因となっています。行政が入らなかったことで、市民の要望が通りやすくなり、それがバスの利用価値を高め、これまでの公共交通とは異なったニーズに対応できるようになりました。醍醐地域では若者や男性のマイカー利用が多いことから、これらの人々がマイカーから公共交通にシフトするための取り組みが今後の課題だと感じました。

今回の研修を通して、市民活動は公共交通のあり方に大きな影響を及ぼし、逆にコミュニティバスは単なる交通システムではなく市民活動の架け橋となっていることがわかりました。

池田 均 ゼミⅡ

IKEDA Hitoshi Seminar II
○参加学生数 16名

新日鉄室蘭工場見学研修

◆ 研修地——室蘭市・登別市



池田 均
地域経済学科
教授



新日鉄室蘭工場にて

研修期間・研修先

7月17日 新日鉄室蘭工場、登別温泉見学

7月18日 帰札

◆ 研修目的

ゼミ研修のテーマは「技術」でした。昨年の研修では縄文中期に栄えた「大船遺跡」見学によって「技術」面での人間の知恵を学びました。以来、6~7千年を経た今日、「新日鉄室蘭工場」での最新の技術を学びました。人間社会発展の要となってきた「技術」の発展に注目したいものです。

◆ 総括

16名の学生諸君との「技術」を学ぶ研修は昨年の「大船遺跡」見学と「函館どつく」見学、そして今年の「新日鉄室蘭工場」見学と続きました。「函館どつく」でも「新日鉄室蘭工場」でも生産過程のほとんどがコンピューター化された中でも、「人間の技術そのもの」が生きていることを学びました。今日の日本の経済社会の困難さを

見せつけられている中で、この国にとって「技術」がいかに大切かを学ぶことができれば良いと考えています。

研修中の学生諸君の真面目さと熱心さに、この研修旅行の意義を実感させられました。

学生研修記



小林 弘輝
経済学科3年
札幌第一高校出身

室蘭での貴重な体験

私達池田ゼミⅡでは7月17日~18日にかけて、地域研修として新日本製鐵室蘭工場の見学に行きました。工場見学の際、まず何よりも、東京ドーム86個分という工場の広さに驚きました。実際に工場内の溶鉱炉を見せて頂いた際には、その周りの空気の熱さに驚きました。そこで作業をしている方は、防護服を着ていましたが、作業をしている人自体がありませんでした。機械による作業が多数を占めているのだと思いました。溶鉱炉の見学後に一度外に出たのですが、その時に感じた外の空気の冷たさが妙に印象に残っています。真夏にもかかわらず、外の空気を冷たいと感じたのは、それ以上の溶鉱炉の熱さのためでしょう。このように、日常生活では決して見る事の出来ない溶鉱炉などを見せて頂けたり、決して経験できない熱さを感じることができたのは、私にとってとても大きな財産です。



棒鋼の生産過程



材料や燃料の展示



見学の様子



見学の様子



見学の様子

新日鉄室蘭工場を見学して

私たちは北海道の産業を支えている「新日鉄室蘭工場」の見学に行ってきました。いきなり工場の敷地や機械設備に驚かされ、工場で行われている作業では、コンピューターの技術と「人」の技術が見事に融合されていたことに感動をおぼえました。あらゆる製品の基盤となる鉄づくりの大きさと大変さ、魅力というもの今回の工場見学で肌で感じる事ができ、昨年の「函館どつく」同様、素晴らしい研修を行うことができ、経済学部の生徒として貴重な体験となりました。



大内 貴弘
地域経済学科3年
苫小牧東高校出身

内田 和浩 ゼミ I

UCHIDA Kazuhiro Seminar I
○参加学生数 8名



内田 和浩
地域経済学科
教授

本別町における「クレイマメ」ブランド化への取り組み ◆ 研修地一本別町

研修期間・研修先

- 9月10日 本別町役場企画振興課（町長、課長等からの聞き取り）、
「義経の御所」（翌日の聞き取り調査へ向けてのミーティング）
9月11日 「豆ではりきる母さんの会」工房、渋谷醸造工場（見学）、町役場会議室（「クレイマメ」関係者からの聞き取り）、「義経の御所」（本別町役場職員の方々との交流会）
9月12日 岡女堂本家十勝豆工房（見学及び工場長から聞き取り）、
本別町役場企画振興課（課長等からの総括的聞き取り）



川本課長、大橋主査と本別町役場の前で

◆ 研修目的

本研修の目的は、「持続可能な発展による地域づくり」を、実際の自治体での取り組みに触れることによって理解することであり、本別町における「クレイマメ」ブランド化への取り組みを調査することで「住民の意欲と主体性の確立」の実態に迫っていくことである。

◆ 総括

前期の内田ゼミナールI（地域社会論ゼミ）では、下平尾勲著『地元学のすすめ-地域再生の王道は足元にあり-』をテキストに、「地域の循環と再生産という視点」を持った持続可能な発展による地域づくりのあり方について学んできた。学生たちは、それらを踏まえて地域研修に取り組み、本別町の取り組みに注目したのである。

本別町は、「豆王国・十勝」の中で、もっとも品質が高い豆の生産地として評価されながら、これまで「十勝産」としてひとくくりされて

販売されてきていた。しかし、近年の「ふるさと銀河線」の廃止に象徴される人口減少等による地域経済の低迷化の中で、本別町が生き残っていくためには、単に豆の生産・卸しだけでなく、直接商品化して売ることが必要と考え、豆の加工販売に力を入れるようになっていった。そして、「地域ブランド化戦略」として、平成19年に黒豆の本別ブランド「クレイマメ」を立ち上げたのである。

地域研修では、この「クレイマメ」ブランド化の仕掛け人である町役場企画財政課長・川本秀二氏や「クレイマメ」に参加している地元企業の代表者への聞き取り調査を行い、「クレイマメ」ブランド化への思いやブランド化による業種を超えた人と人との結びつきの深まりを明らかにした。今後の課題として、町民全体への浸透化と町へのプライドの回復、そして豆の消費拡大と雇用の拡大を上げた。

学生研修記



宮崎 智太

地域経済学科2年
帯広三条高校出身

町民一丸の取り組み

本別産黒豆を使った特産加工品ブランド「クレイマメ」の取り組みを3日間にわたり視察しました。町や町内の同ブランド化までの経過や今後の構想などを聞き取り、学びを深めました。これに関わっている4つの企業へ聞き取りをしたところ4社ともブランド化へ全力で取り組んでおり、一切の妥協が無く、本別町のために精一杯尽くしていました。また、町長や町担当者から話を聞くなど貴重な体験をさせていただきました。

初めての聞き取り調査で緊張しているなか、みなさん優しく私たちの質問にしっかりと答えていただきました。調査を進めていく上でみなさんと仲良くなり、一緒に焼肉を食べたり話をするなどとても楽しい時間を過ごし、本別町での3日間全てが思い出になりました。



ミーティングの一コマ



熱く語ってくれた高橋正夫町長



「クレイマメ」商品



まめっこ倶楽部メンバーへの聞き取り調査



渋谷醸造での工場見学



本別まめ工房の見学



岡女堂本家鈴木工場長への聞き取り調査



山口発酵食品山口社長への聞き取り調査



佐藤 勝俊

地域経済学科2年
帯広大谷高校出身

企業と役場が一つになりブランドづくり

私たち内田ゼミナールでは「役場と企業が一つとなりクレイマメという黒豆ブランドを作り立ち上げたが、どのような効果があったか」について様々な点を視点にして、本別町へ行き各企業や役場の人たちに質問しました。結果クレイマメの経済効果はまださほど進展していなかったが、「他企業に関心を持つようになった」という企業があり、経済効果以外にも企業同士の感情の変化などという様々な効果がありました。実際に現地に行くことで事前学習とは違う結果が現れたり、感情や考え方が全く違う企業もあり、とても勉強になりました。それに主張が違う企業が一つになって協力していることに対し、関心と面白みも持ちました。役場、企業の方達には忙しいにも関わらず親切に質問を受けてもらい、感謝の気持ちでいっぱいです。本当に有意義な3日間でした。

奥田 仁 ゼミⅠ・Ⅱ

OKUDA Hiroshi Seminar I・II
○参加学生数 24名



奥田 仁
地域経済学科
教授

地域建設業の現状と課題

◆ 研修地—網走市・斜里町・丸瀬布町

研修期間・研修先

- 9月10日 丸瀬布町菅野組訪問（じゅんさい栽培見学）
網走土木現業所菊池部長、網走建設業協会会長菅野社長の講演
- 9月11日 6班に分かれて建設業事業所訪問、現場見学、
建設業協会会員・土木現業所職員らを前に報告会、合同バーベキュー大会
- 9月12日 道立北方民族博物館、オホーツク流水館見学、帰礼



網走市の天都山山頂にて

◆ 研修目的

学生にとって建設業はあまり身近な産業ではない。しかし、建設業は北海道経済の中で大きな位置を占め、現在の地域経済の落ち込みの主要な要因となっている。こうした地域建設業の現状を知ると共に、異分野進出を含めた今後の方向性を学ぶことを目的とした。

◆ 総括

網走建設業協会と網走土木現業所（土現）の皆様のおかげで、非常に中身の濃い研修を行うことができた。初日の網走市に向かう途中、丸瀬布町の菅野組を訪問したところ、いきなりじゅんさい沼に案内されたのには学生たちも少し面食らったようだった。ここで働くおばさんたちの指導を受けつつ小さなボートでじゅんさいの摘み取り作業を体験する中で、いま地域建設業がさまざまな工夫をしながら異業種への展開を模索していることを実感させられた。

このあと網走建設業協会の会議室でお二人の講演をいただいた。まず網走土現の菊池部長が地域経済と建設業の現状について、協会長の菅野社長は厳しい経済情勢の中、建設業界としての地域貢献の活動を話して下さった。

翌日は朝から、4人ずつ6班に分かれて7社（ひとつの班だけ2社）を訪問した。これは事前の連絡、挨拶から、インタビューまで、学生がすべて自分たちだけで行い、建設現場なども案内していただいた。このあと夕方からは協会や土現の方々を前にした全体会で、各班の報告と質疑を行ったため、学生たちにはかなり緊張した一日だったと思われる。ただ夜の部の野外大パーティでは、人生の大先輩達から個別にずいぶん貴重な話を聞かせていただいたようである。

学生研修記



佐藤 慎也
地域経済学科3年
北海高校出身

これからの網走市の建設業「地域に根付き地域に還元」

今回の地域研修で私たちは、網走市建設業協会の方々のレクチャーや、建設業の企業を訪問し、お話を聞かせていただきました。ほとんどの企業が、公共工事の激減により業績が悪化し、経営が厳しい状態になっていました。しかしその中で、本業の建設業だけではなく、介護施設経営やイチゴ栽培など、異業種への事業を展開して経営の建て直しを図っていました。実際に、異業種展開は業績が良く、経営の回復に繋がっているだけでなく、地域の雇用を生み出すなど、地域の活性化に繋がるといふ効果も出ています。このように、異業種展開によって地域の活性化を目指したり、道路の清掃作業や冬場の除雪作業などのボランティア活動も積極的に行うなどして、建設業協会全体で「地域に根付き地域に還元していく」という想いが、どの企業からも感じられました。



緊張の報告会

鋭い問題提起にタジタジ

建設業協会での講演

報告会全体の様子



じゅんさい沼



グループホーム陽だまり（異業種展開）

道道工事現場

案内していただいた知床峠（除雪作業現場?）



川原 和晃
経済学科2年
苫小牧東高校出身

網走における学生地域研修記

今回、僕はゼミの地域研修において、網走の会社へ訪問しました。訪問先は建設業が多く、公共事業削減で不況の中、経営の多角化や付加価値を付ける為の経営努力などをされている事を聞きました。僕達の訪問した先の建設業の会社は、イチゴの栽培、ネット上での販売などをしており網走の厳しい現状や、建設業が地域の基盤としての大切さなどを語っていただき経済の流れをより詳しく知ることが出来き、普段の授業では感じる事の出来ないリアルな経済を肌で感じる事が出来る研修でした。

河西 勝 ゼミ I・II

KASAI Masaru Seminar I・II
○参加学生数 11名

川村 雅則 ゼミ I

KAWAMURA Masanori Seminar II
○参加学生数 10名



河西 勝
経済学科
教授



川村 雅則
経済学科
准教授

夕張における中小零細事業者の経営実態

研修期間・研修先

- 6月 調査研究計画の検討開始
- 7月 現地協力者との打ち合わせ
- 8月 事前学習
- 8月26日 夕張市役所にてレクチャーを受けた後、夕張市内で事業者調査を開始
- 8月27日 終日、調査を実施
- 8月28日 正午過ぎまで調査を実施、帰札
- 9月~11月 調査結果のとりまとめ、合同検討会

◆ 合同研修目的

財政再建団体入りした夕張で事業を営む方々の経営の実態や課題を明らかにすること、その作業を通じて、現行の夕張財政再建計画を、単なる財政の帳尻あわせではなく、夕張の再生計画にするために何が求められているのか探ること、である。

◆ 合同総括

この研修は、西村宣彦、川村雅則、河西勝（以上、北海学園大学）、木下武徳（北星学園大学）のゼミの参加で行われた。西村・木下ゼミは、地域住民調査を担当し、川村・河西ゼミは事業者調査を担当した。具体的には、商工会議所のご協力を得て、会員事業者に対して事前に調査票を配布の上、3日間の実地研修期間で各事業所を訪問し、調査票の回収作業とあわせて聞き取りを行った。調査・聞き取りの内容は、主として、事業経営や生活の現状について、あるいは夕張再生

に向けた課題などである。

104事業者の調査結果（回答）からみえてきたことの内、とりわけ強く感じられたのは、財政再建団体入りしてから一層のスピードで進む人口流出が各事業者の経営を悪化させているということである。この間の燃料価格や資材・仕入れ価格の高騰も経営悪化に拍車をかけていた。なかには事業の展望が見いだせず、いますぐにでも廃業を考えているケースもみられた。現行の夕張再建計画は夕張を再生させるものとなるのか、引き続き検証していきたい。

今回学生達は、事前研修で夕張の財政や歴史を勉強し、また事業経営者に何をどう尋ねたらよいか、中小企業問題の専門家から心構えを聞くなどして、聞き取り調査に臨んだ。そして夕張事業者の実態を明らかにすることに一定程度成功した。

学生研修記（河西ゼミ）



松本 花奈子
経済学科3年
札幌新川高校出身

夕張の事業者調査

調査は、財政再建団体入りした夕張に暮らす人々の実態を調べるために、自営業者・企業の方々に事前に配ったアンケートを自分たちの足で回収し、その際に聞き取り調査をさせていただくという形で行いました。この研修では新聞やテレビで見たものとは違う夕張の姿を見ることができました。メディアで報道されるのは、赤字の問題・人口流出等、暗い内容が多かったのですが、実際話を聞くとそのような状況でも、夕張で住み続けた人はこの夕張で暮らしていきたいと考える人が多く、また逆に売り上げが伸びたという企業も数は少ないですが、存在しました。このように現地に赴き自分の目で確かめることで違う面から夕張を見つめることができ、さらに今回研修を合同ゼミで行うことで違う刺激を受けました。貴重な体験となる研修となりました。



市役所にてレクチャー



市役所にてレクチャー



聞き取り中



聞き取り中



休憩中



藤原 邦弘
経済学科3年
札幌藻岩高校出身

夕張市における中小零細企業の直面している状況について

今回の地域研修では二泊三日の日程で、中小零細業者が直面している問題を明らかにし、夕張市の経済・生活等の実態を明確に把握することを目的として調査を行なった。

調査を行なって明らかになったことは、やはり夕張の事業者が置かれている状況は深刻であるということだ。顧客（人口）の減少が全業種に共通した問題点であるが、これは財政再建団体入りと密接に関係した問題であると考えられる。そのような売上減少の中で世帯の収入源を本人や家族の年金でまかなっている事業者が多く、本業の収入以外に頼らざるを得ない状況にある。聞き取り調査では、このような厳しい環境のなかで一生懸命やっつけようとする姿が見受けられ、事業者の方々のたくましさも感じることができた。



市内を移動中



宿泊所「ひまわり」にて



藤倉市長より歓迎のご挨拶



宿泊所でのミーティング

学生研修記(川村ゼミ I)



黄金 知広
経済学科2年
紋別北西高校出身

夕張での地域研修を振り返って

訪問先の事業者の方々から聞き取りを行い、特徴的だったのは、事業経営の面では事業主の高齢化、コストの増加や業務の減少による収支の悪化などが進み、生活面では公共交通が使いにくいこと、あるいは、診療所が遠くて通院しにくいなどの声があがったことです。そして最も懸念されていたのが夕張の人口減少でした。人口の減少が事業者自身の収入や市の税収にも影響を与え、雇用の場・機会も喪失させていること、そのことがまた、仕事を求めて夕張を去りさらに人口が減少するという悪循環をもたらしている、それが今の夕張ではないでしょうか。もっとも、将来展望がはっきりと見通せないそんな状況でも、前向きに明るく生活を営む方々も多く、都会には無い暖かさを感じられました。夕張市を始め、この研修に御協力いただいた多くの方々にこの場を借りてお礼申し上げます。



事前学習会の様子



事前学習会の様子



夕張市内を移動中



花屋さんにて聞き取り



雨の中でも調査



宿舎での食事



駅にて休憩中



聞き取り調査中



野々川 華奈
地域経済学科2年
札幌北陵高校出身

商店街に元気を！

私たちのゼミでは、財政再建団体入り表明から2年を迎えた夕張で、聞き取りを中心とした事業所調査を行った。調査を行って印象的だったのは、「後継者問題」についてである。すなわち、事業者の6割以上が60歳以上であるにもかかわらず、「後継者がいない」と回答したのは全事業者の3分の2に上った。また、実際に聞き取り調査で話を伺った、30年間夕張で商店を営む男性のケースでは、後継ぎがいないために「自分の代でこの店は閉める」と断言された。この商店には生活雑貨が並び、地域住民は皆顔なじみという感じで、コミュニティにとっても欠かせない店のはずだ。現在、日本のどの地域でも自営業における後継者問題は深刻であるが、夕張再建計画が始まって2年を迎えたここ夕張でも、人口流出が進み、中小零細業者の廃業もまた進んでいる。そのことがまた夕張に住み続ける人々にとってどんなに大きい問題であるかを実感した。

川村 雅則

ゼミⅡ

KAWAMURA Masanori Seminar II
○参加学生数 7名 (うち履修者 3名)



川村 雅則
経済学科
准教授

介護・介護労働をめぐる問題と課題

◆ 研修地——主として札幌市

研修期間・研修先

- 4月~7月 札幌市内の特養老人ホーム施設を訪問し、施設長や職員から聞き取り
- 7月~8月 札幌市内の特養を中心に労働者アンケート調査を実施
- 9月~11月 その他の特養で、同じく労働者アンケート調査を実施
- 10月 調査結果をふまえてシンポジウムを開催。
- 12月 インゼミ大会 (@ 福岡大学) で調査結果を含む研究成果を報告



福岡大学にて

◆ 研修目的

危機的状況にあるとされる介護現場・介護労働の実態を明らかにし、その改善のために何が求められているのか。わが国の社会保障制度の現状と課題を視野にいれて考えること。

◆ 総括

医療、年金そして介護など、わが国社会保障制度のほころびが深刻化しつつある中で、私達のゼミでは、介護・介護労働の現状に焦点をあてた調査研究プロジェクトをこの1年間、展開してきた。具体的には、特別養護老人ホームで働く労働者や施設長からの聞き取りを重ねつつ、大規模なアンケート調査を実施した（アンケートは、最終的には、1148人の介護職、124人の施設長から回答を得た）。学生に研究者としての力量・ふるまいを求めるといふ、いささか強引とい

うか無理を承知で行った今回のプロジェクトではあったが、日曜祭日を返上で作業してきたこともあり、危機的状況にある介護現場の実態と課題を明らかにすることに一定程度成功した。その成果は、新聞やテレビ等でもとりあげられ、例えば、『北海道新聞』(08年09月01日付)では、「厳しい環境で質低下の懸念/年収300万円以下74%、「社会的評価低い」65%/現場から切実な訴え」という見出しとともに私達の調査結果が報じられた。その後も、シンポジウム（「介護地獄はもうごめん!!介護に笑顔と希望を!!」）や、インゼミ大会等を通じて、社会に対して問題提起を行ってこきた。調査研究を通じた社会貢献という点もさることながら、この取り組みに参加した学生の成長を強く感じる事が出来た、有意義な一年であった。

学生研修記



林 城治

経済学科3年
別海高校出身

日本の介護現場の現状について

私達のゼミでは、この1年間、主として介護労働の現状について学習してきました。介護現場の行き詰まりは介護保険制度の財源不足からきています。高齢化が急速に進んでいるにもかかわらず、財源を圧縮しているために、介護労働者の労働条件・処遇は低いままになっているのが現状です。実際に施設を訪問して聞き取り調査を行ったところ、低い待遇に不満を持っている職員の方が多いということがわかりました。また仕事に見合わない待遇のため、介護の現場を離れてしまう人が後を絶ちません。人手不足の状況では、利用者に対するサービスも悪化し、最終的に困るのは介護を受ける私たちの側だと感じました。実際に施設を訪問することで現場の生の声を聞くことができ、日本の福祉の弱さを痛感した1年でした。また世代の違う沢山の方たちとお話することで自分自身大きく成長できたと思います。



介護労働者からの聞き取り

特養施設見学



施設見学

特養施設で勉強



インゼミの風景



シンポジウム

検討中

介護労働をめぐる問題について

近年、介護の現場では労働者の低賃金、長時間労働、人手不足、また利用者の負担増や介護難民など多くの問題が発生しています。僕らのゼミでは、介護労働者に焦点を当てて介護施設の訪問やアンケート調査を行い、介護の現状を明らかにしようとしてきました。施設訪問やアンケートの自由回答では、労働者の生の声を聞くことができ、過酷な労働や低賃金、将来に対する不安などの意見が多く見受けられました。一方で、そのような環境下でありながらも献身的に介護という仕事に携わる人が少なくないということがとても印象的でした。しかし、施設の運営や労働者の生活はすでに限界ぎりぎりにまで達しているとのこと。財源等の問題があり、事態の改善は容易ではないのかもしれませんが、現行の制度は介護労働者にかかる負担があまりにも大きいと感じました。



辻 泰平

経済学科3年
函館ラ・サール高校出身

北倉

公彦 ゼミⅠ・Ⅱ

KITAKURA Tadahiko Seminar I・II
○参加学生数 43名

グリーンツーリズム・part 5

◆ 研修地 — 長沼町



北倉 公彦
地域経済学科
教授

研修期間・研修先

- 9月8日 グリーンツーリズム事業の概要（長沼町役場担当者から）、長沼町グリーンツーリズム運営協議会会長の講話、意見交換会、パークゴルフ体験、長沼町役場職員との懇談会（夕食会）
- 9月9日 長沼町総合保健福祉センター“リフレ”見学、そば打ち体験、JAながぬま専務理事の講話、野菜集出荷場見学、いも掘り体験



“リフレ”で記念撮影

◆ 研修目的

グリーンツーリズムをさらに活発化させている長沼町において、その実態を知ると同時に、グリーンツーリズムを支えている農業への理解を深める。また、自ら体験をする。

◆ 総括

グリーンツーリズムをテーマに掲げて5回目の長沼町の研修であったが、去年に引き続いてのゼミⅡの学生にとっても、改めて長沼のグリーンツーリズムの活動とそれを支える農業の実態を知ることができたと思う。

また、パークゴルフ体験、蕎麦打ち体験、芋掘り体験と、体を動かして楽しむことの快感を得たと思う。

例年のことながら、夕食会には、本学経済学部出身の戸川町長を

はじめ、OBを含む役場職員が大勢参加してくれ、大学では聞くことができない貴重な話を聞くことができた。

札幌からわずか1時間のところに、素晴らしい景観をもつ長沼町があり、そこでは困難な農業情勢の下でも、多くの元気な人たちがいることを実感できた研修であったと思う。

研修の実施に全面的にご協力いただいた長沼町、JAながぬまの皆様から感謝申し上げます。

学生研修記



星 久美子

地域経済学科2年
石狩南高校出身

グリーンツーリズムの効用

長沼町は、石狩平野の南端部に位置する道内でも有数の米どころである。しかし、農家人口の減少が著しい。その原因を農家の息子や娘が都会に働きたいからと考えていたが、農家の親たちが農業のつらさや大変さから、農業を継がせたくないと考えているためであることを知った。都会に出た子供部屋を農家民宿として利用しているのが長沼のグリーンツーリズムである。宿泊して農業体験をした子供達には、食べ物がどのように作られ、仕分けされ、食卓に届くのかを認識することによって、食べ物の大切さを知り、生き物にふれて感動する。子供達を迎えた農家の人達も、都会の子供達と接して新しい発見をしたり、視野が広がるという。グリーンツーリズムが全国に広がることにより、食生活の改善や残飯の減少につながり、食料自給率の向上にも役立つことであろう。



グリーンツーリズムの説明を聞く



パークゴルフ体験



先輩の戸川新町長にゼミ長から花束贈呈



夕食会は長沼町職員とジンギスカンパーティー



いも掘り体験



そば打ちの説明を聞く



そば打ち体験



そば打ち体験

長沼で考えたこと

長沼町での研修を通じて、日本農業の将来を考えさせられた。日本における農業離れの原因は、長沼町に限らず農業所得の低さにある。これを放置すれば後継者は確実にいなくなるし、グリーンツーリズムの存続自体が難しくなる。

西村 仁志

地域経済学科2年
函館西高校出身

日本の農家は、血縁関係のある者に託したいと考えているようであるが、血縁関係がなくても、信頼できる人であれば、たとえ外国人であっても、農業経営を移譲してもよいのではないだろうか。

少子高齢化が確実に進む中で、国民に安全で安心な食料を供給し続けるためには、日本に農業が存続していかなければならない。そのためには、世襲制の農業から決別する必要があると考えたのである。

小田清

ゼミⅠ・Ⅱ

KODA Kiyoshi Seminar Ⅰ・Ⅱ
○参加学生数 26名

苫小牧東部開発と周辺地域開発の諸問題 ◆ 研修地—苫小牧市・日高町・平取町



小田 清
地域経済学科
教授

研修期間・研修先

- 8月3日 苫小牧東部・柏原展望台、平取町・二風谷ダム・二風谷アイヌ民俗資料館
8月4日 道開発局苫小牧港湾事務所（西港視察）、(株)苫東会社（会社概況）、苫小牧東部工業基地（立地施設の視察）



苫東基地内・つた山山林にて

◆ 研修目的

1971年にスタートし、全国的にも注目を集めてきた「苫東大規模工業基地開発」は、1999年に開発会社が倒産し、新会社に移行した。また、ダム建設等は工業用水需要がないのに進められた。それらの地域問題を実際に学ぶことを目的としている。

◆ 総括

学生諸君にとって「苫小牧東部開発計画」は講義の中で学んだが、現実の開発経過とそこでの問題点については全く知らなかったと思う。そこで、事前に「苫東開発計画」の内容とその建設過程、倒産と新会社設立に至る経過を、資料やビデオを使って学んだ。また、最近の動きを事前調査で得た会社資料等を利用して理解を深めた。

最初に訪れた工業基地のほぼ中心にある「柏原展望台」では、見渡す限りの森林地帯に驚き、企業立地の少なさを実感した。また、工

業用水需要が全く無いのに、アイヌ民族文化の聖地に建設された「二風谷ダム」に関しては、貯水なしの変則ダムのため、下流部で洪水被害が起きていることを被害者の1人でもある「料理屋」のご主人から直接に話しを聞いて、ムダな公共事業が地域住民を困らせていることの問題点を学ぶことが出来た。

企業誘致を一手に引き受けている(株)苫東会社では、専務さんから会社の歴史を詳しく伺い、企業誘致の難しさを勉強した。工業基地内視察では、北電火力発電所や石油備蓄基地等、大型の非製造業の立地が目立ち、学生諸君は北海道経済・企業との関連の弱さに疑問を持ち、土地の有効利用をそれぞれに考えたようである。

事後レポートでは、大規模開発とダム建設に関連しての批判的な内容が多く、計画と現実の乖離を実感したことは大成果といえよう。

学生研修記



熊野 礼菜

地域経済学科2年
札幌手稲高校出身

二風谷ダム問題と公共事業を考える

今回の研修で最も強く感じたことは、苫東開発に必要な二風谷ダムを、多くの犠牲をはらってまでも政府はなぜ建設したか？という疑問でした。本来、ダムというのは地域の人々がより暮らしやすい環境をつくるためのものであるはず。しかし、現地の人のお話を伺って、ダムが建設されたことによって守られるはずの自然が破壊され、地域の人々も洪水被害にみまわれ、アイヌの伝統的な文化までもが失われようとしていることが分かりました。実際にダムを見た限りでも、貯まっている様子もなく、濁った水がただひたすら勢いよく流れているだけで、不気味さを感じました。この研修を通して、税金そして公共事業のあり方を考えさせられました。また、今後、苫東開発や二風谷ダム、北海道がどう作り変えられ、発展していくのかに大きな関心を持つ良い機会にもなりました。



二風谷ダム全体図



二風谷ダム・下流部の濁り



展望台にて・広大な森林地帯



ダム被害講話・熱弁・良く伝わった



(株) 苫東・事務所



(株) 苫東・高橋専務の講話



空き地が多い



国家石油備蓄基地・タンク直径80m

苫東開発と地域の現状を見て

苫東開発の現状を、実際に自分の目で見たことで、これまで工業都市だと思っていた苫小牧市域にも多くの自然があることを知りました。例えば、柏原展望台という苫東全体を見渡せる場所で、辺り一面緑に覆われた風景を見た時には、予想していた様子との大きな違いに驚き、自然豊かでクリーンなイメージを受けました。この地域には全国植樹祭が行われた土地もあり、企業立地と自然との共生を考えながら開発をしていく必要があるように感じました。現在の苫東地区は、昨今の経済不況などから立地企業の経営状況が思わしくなかったり、国際ターミナル港区の移転に関わる安全確保のための基盤整備の必要性といった緊急の問題を抱えています。このように様々な問題を抱えている苫東地区について、これからの動向を今後も注目して見ていきたいと思えます。



須藤 将仁

地域経済学科3年
旭川凌雲高校出身

佐藤 信 ゼミ I

SATO Makoto Seminar I
○参加学生数 14名

めん羊を活用した地域づくり

◆ 研修地——士別市



佐藤 信
地域経済学科
教授

研修期間・研修先

- 9月16日 士別市経済部、ジンギスカンハウスなど
- 9月17日 士別市博物館、世界のめん羊館、しずお農場など
- 9月18日 帰札



「羊飼いの家」の前で

◆ 研修目的

本研修の目的は、サフォークランドと呼ばれる士別市で、なぜめん羊がまちの特産物となったのか、めん羊飼育において留意点はどのようなことか、士別産羊肉の地元消費はどの程度であるか等を明らかにすることである。

◆ 総括

士別市では中心産業である農業の低迷とともに過疎化が進行している。この状況を打開するべく、「めん羊」「ジンギスカン」をキーワードとした地域振興に力を入れている。士別市のめん羊は主に羊毛を得るために第二次大戦前から飼育されてきたが、戦後は輸入肉の急増や化学繊維の開発により需要が激減し、飼育数も減少した。その後、めん羊牧場の設置(1966年)、士別サフォーク研究会の設立(1982年)など、めん羊に関する独自の取り組みをすすめてきた。訪問時は

内閣府「地方の元気再生事業」へ士別羊のブランド化を目指すために申請するなど、取り組み強化の最中であった。

ゼミナールIでは、地域研修の実施前に、地域の概況、まちの歴史、めん羊飼育に関する事前学習を進め、疑問点・テーマを各自準備していた。研修期間には、士別市役所経済部の担当者へのヒアリングや、博物館、めん羊飼育農場への見学を通して疑問点を少しずつ解明していった。結果、めん羊は繁殖効率が悪く衛生管理も難しいこと、しかし安全・安心な羊肉需要が高まっており首都圏へ高級肉として販売する可能性があること、地元消費に関してはホテルやレストランでの独特のメニュー開発に力を入れていること等が明らかとなった。研修参加者にとって初めての調査で不慣れな所もあったが、関係者から直接話を聞くなど良い体験となったと思う。

学生研修記



武田 淳
地域経済学科2年
札幌旭丘高校出身

「士別のサフォーク」ブランド

士別市は羊の街でよく知られています。実際、士別市に入ると「サフォークランド士別」と大きく書かれている看板を見ることができ、サフォーク羊肉の生産は士別市の活性化やイメージ作りに貢献していると理解できます。もっとも、市役所職員の話によるとサフォーク種は高価な羊肉のため地産地消の推進のためではなく、今は都市圏に出荷し富裕層に食べてもらうことが狙いようです。また、『しずお建設グループ』が経営している農業生産法人『しずお農場』では、サフォーク羊肉の他にも羊の配合飼料に使うビートや様々な野菜も生産しており、その野菜を販売する活動もしていました。建設業だけでは経営が厳しく新分野へ進出しなければ生き残れないという実態を垣間見ることができました。地元産羊肉を使った「ラムトロ丼」の味は今でも忘れられないほど美味でした。



士別市役所内で説明を受ける



士別市博物館で説明を受ける

ジンギスカンハウスで夕食



世界のめん羊館のひつじ (ジャコブ)



しずお農場にて



染色をした羊毛



世界のめん羊館のひつじ



吉田 彩夏
地域経済学科2年
石狩南高校出身

士別市のめん羊を活用した地域づくり

私たちは、北海道の代表的な食べ物であるジンギスカンを特産としている士別市を訪問しました。士別市では市と市民、自治体が一丸となって、サフォーク種のめん羊が士別市の顔となるように取り組んでいます。私たちはまず士別市役所を訪問し、市としてどのように取り組んでいるかヒアリングを行いました。また、実際にめん羊を飼育している牧場や、観光名所である「羊と雲の丘」などにも行き、話を聞かせてもらいました。その結果、士別市はめん羊をブランド化し、高級食材として認知してもらおうと努力していることがわかりました。その為にはめん羊生産の拡大が必要ですが、飼育農家不足や、飼育に繊細な管理が必要な点などから、大きく拡大することが難しいこともわかりました。地域づくりについて真剣に考えることができた、とても充実した3日間でした。

徐 涛

ゼミ I・II

JO Tou Seminar I・II
○参加学生数 14名

地域振興と日中経済

◆ 研修地—— 芦別市・千歳市



徐 涛
地域経済学科
准教授



北日本精機的小林社長と

研修期間・研修先

9月4日 (株)北日本精機

9月5日 (株)ダイナックス

◆ 研修目的

本研修の目的は、芦別市・千歳市にそれぞれ位置する北日本精機株式会社と株式会社ダイナックスの調査を通じて、地域振興と日中経済交流の関係を明らかにすることである。

◆ 総括

資料調査、聞き取り調査ならびに工場見学を通じて、北日本精機とダイナックスの創業、経営理念、および中国進出の経緯と現状について詳しく調べた。

二社はともに、国内で投資を増強し、生産規模を拡大しており、海外進出を加速している。世界シェアが高いグローバル企業であり、北海道の元気企業である。

二社が海外で事業を展開しながらも、国内で投資を拡大している

ことに、注目した。つまり、経営がグローバルに構築されているとはいえ、北海道の競争力が優位に立つ側面も存在する。これは交通の利便性、労働力の技術熟練度、生活インフラの充実度などに現われている。

現段階の中国進出の主な目的は、中国市場の獲得である。低い労働力コストが魅力的であったが、高い離職率や労働雇用法改正などによって労働力コストはかなり上昇した。

日中の工場はそれぞれの優位性をもつ。両者の補完関係を活用すれば、地域経済の振興を図ることができる。本研修によって、北日本精機とダイナックスは雇用拡大や環境保全などにおいて、地域に大きく貢献していることがわかった。

学生研修記



須藤 孝洋

地域経済学科2年
滝川高校出身

グローバルな企業!

「地域振興と日中経済」をテーマのもと、地域研修を行ってきました。芦別市の北日本精機株式会社では、小林英一社長自らが会社の創業史を話して下さいました。また、中国進出に関しては、「企業は地域に貢献する」という考えのもと、現地の文化を尊重し、社会へ貢献することを念頭に置いていると話して下さいました。千歳市の株式会社ダイナックスでは、工場見学後各部門担当者の方々からお話を聞きました。中国進出の目的は、「低賃金による生産拠点というだけでなく将来の市場としての重要性を見出すこと」です。この二社は、地域経済に貢献するとともに、中国進出を通して世界との繋がりを持つ、まさにグローバルとローカルを両立している「グローバルな企業」であると思いました。実際に企業を訪問し、生のお話を聞くということはとても貴重な体験となり、財産となりました。



北日本精機小林社長の会社紹介



経営理念を熱く語る小林社長



北日本精機・最先端設備の紹介



北日本精機の事業紹介



北日本精機・最先端設備の紹介を真剣に聞く調査風景



ダイナックス・企業内保育園



カナディアンワールド公園・散策



三井 基裕

地域経済学科3年
鹿追高校高校出身

北海道企業ならではの強み

北日本精機で社長と直接に会談することができ、とても貴重なお話を聞くことができました。芦別市という地方都市ならではの立地条件を生かしたアウトドアやゴルフ・釣りなど、生活そのものを楽しむことが労働者にとってまず大切です。これは芦別の強みであり、芦別工場の生産性はどこにも負けません。そして、海外からの研修生、技術者などの移住による地方都市の国際化構想を描いてくださいました。ダイナックスでは、女性社員の離職率を下げるために、会社に保育園を設け、復帰しやすい職場作りを行っている。工場内見学では、環境面などに配慮したさまざまな取り組みが見られ、エコな工場だと思いました。今回の地域研修を通じて、私は、実際に足を運ぶことで学校での授業では得ることの出来ない貴重な体験をすることができました。

西村

宣彦 ゼミ I・II

NISHIMURA Nobuhiko Seminar I・II

○参加学生数 33名

西村 宣彦
地域経済学科
講師

高校を改装した宿舎「ひまわり」前で

研修期間・研修先

- 8月26日 夕張市役所（市長・総務課長のレクチャー）、市内各地で聞き取り調査を実施
- 8月27日 市内各地で聞き取り調査を実施
- 8月28日 (株)夕張リゾート営業課長のレクチャー、夕張医療センター見学、帰札

◆ 研修目的

「全国最高の住民負担、全国最低の住民サービス」と言われた財政再建計画の下、夕張市の高齢者が実際にどのような生活を送っているのかを正確に把握するために、聞き取り調査を行い、地域の現状と課題を明らかにしようとした。

◆ 総括

北星大の木下武徳ゼミ（社会保障論）と合同で実施した。不慣れな聞き取り調査に、学生も担当教員も悪戦苦闘の連続であったが、財政再建団体に移行した夕張市における高齢者の生活実態を客観的に把握する試みはこれまでにないもので、各種メディアから注目が集まり、大変ながらもやり甲斐のある研修となったのではないかと。

調査を通じてわかったのは、一般に流布している夕張の「暗く沈んだ町」のイメージとは異なり、意外に明るく元気な高齢者が多か

ったということだ。「健康管理にだらしないから財政破綻した」といった指摘も聞かすが、健康維持に気を遣っている高齢者が大部分であった。夕張に強い愛着を持ち、8割近くが今後も今の場所に住み続けたいと答えた。「夕張は意外に住みやすい」という高齢者の言葉の中に、夕張再生のヒントがあるように感じられた。

地域課題としては、地域医療、除雪、現役世代の雇用の場、学校教育体制、公共交通、行政と住民のコミュニケーションなど、多岐にわたる回答が寄せられた。実際の地域づくりに生かしていくためには、さらにターゲットを絞り込んだ綿密な調査が必要となろう。調査を通じて高齢者を元気づけることも密かな狙いだったが、逆に高齢者から元気をもたらしたという学生も多かった。調査にご協力いただいた全ての夕張市民の皆様に、心より御礼申し上げます。

学生研修記



鹿内 綾

地域経済学科2年
札幌国際情報高校出身

石炭のふるさと夕張を訪れて

市役所では以前に行われた住民懇談会の話を書きましたが、市民との溝は依然として大きく、まだ時間がかかると思いました。市長が自分の足で夕張を回って市民の声を取り入れる事で、少しずつ改善されていくのではないかと感じました。また聞き取り調査では、財政破綻のしわ寄せが年金生活の高齢者にも来ていて、とても裕福とは言えない状況でした。ただ個々のお年寄りには、趣味や娯楽、外への繋がりが強く、精神的にも体力的にも健康で幸せそうに見えました。そして夕張の人たちの温かさに触れてとても充実した時間を過ごすことができました。実際に訪れる事によって、メディアの情報が必ずしも真実を捉えていないことがわかり、夕張の今後の方向性や改善点を、自分なりに見つけることができました。このゼミに参加して大きな満足感の得られた貴重な四日間でした。



炭鉱住宅が並ぶ独特の景観



聞き取り調査の様子



聞き取り調査の様子



聞き取り調査の様子



聞き取り調査の様子



聞き取り調査の様子



調査を終え宿舎で反省会



調査を終えて宿舎で反省会



砂沢 昂彦

地域経済学科3年
岩見沢西高校出身

再生に向かって

西村ゼミ I・II は今回、夕張市に行き、財政再建団体申請後の行政サービスの状況や、それによる市民生活への影響について学びました。初日に訪ねた市役所では、多額の負債を十数年で返済することの厳しさや、職員の削減によって他の地域との行政サービスの格差が生じるのではないかと不安について語られました。その後は夕張市の各地区にある市営団地や福祉施設を訪問し、アンケート調査を実施しました。調査では、税負担の増加や雇用の場の減少で移住を考えているという意見もありましたが、大半のお年寄りは元気で明るく過ごしている印象を受けました。また、お年寄りが一丸となりボランティアをしている姿や、夕張に残って介護の仕事に就きたいという若者など、再建に意欲的な人たちも見受けられ、夕張の厳しい現状の中に一筋の希望が見えた研修となりました。

高原 一隆 ゼミ I・II

TAKAHARA Kazutaka Seminar I・II
○参加学生数 22名

水野谷 武志 ゼミ I・II

MIZUNOYA Takeshi Seminar I・II
○参加学生数 11名



高原 一隆
地域経済学科
教授



水野谷 武志
地域経済学科
准教授

商店街活性化のための基礎調査

研修期間・研修先

- 2008年**
8月18日 訓子府に移動、
訓子府町農林商工課（訓子府町の概要）、
町内主要施設の巡回
8月19日 店主へのアンケート調査、
消費者へのアンケート調査
8月20日 訓子府町商工会（商工会の歴史と商店街の現状）、
消費者へのアンケート調査
8月21日 斜里町に移動、
ウトロにて現地の漁師から概要説明
8月22日 帰札
2009年
2月23日 調査結果報告会（訓子府町）

◆ 合同研修目的

北見市の西側（つまり訓子府町に隣接地域）への大型店が立地することによって、訓子府町商店街の衰退が顕著になっている。その実態を店主、消費者へのアンケートを通して明らかにし、小規模都市の商店街再活性化の方向を考える。

◆ 合同総括

この研修・調査は水野谷ゼミと合同で総勢33名というやや大がかりに行った共同調査である。研修・調査の主要な対象は訓子府町内の商店街に絞った。近年、小規模都市に限らず、かつて街の中心的機能を担っていた中心市街地の商店の多くは人通りが少なく閑散とした状況で、売上も大きく減少するなど街としての機能を失い、衰退の道を歩んでいる。訓子府町商店街の現状もその例に漏れない。商店街の衰退の原因として、近郊への大型店の出店の影響があげられる。

それも大きな要因であるが、同時に地域の構造変化にともなう地域内の商店にも課題はないのだろうか。この研修・調査は双方からの衰退要因を店主と消費者双方からのアンケートを通して明らかにしようと試みた。アンケートは町内ほぼすべての商店56店とアットランダムに消費者を対象に行い、消費者からは70歳未満の消費者190人、70歳以上129人から回答を得た。店主に特徴的だったのは後継者不足であり、消費者に特徴的だったのは70歳以上の消費者の半数が町内の商店を利用するという結果であった。これから一層高齢化が進む日本社会そして訓子府町にあって、人々の日々の暮らしにとって地元の商店街がどのような意味をもつのかを考え、それに対応する中心商店街の再活性化に向けた対策が求められていることを強く感じた。

学生研修記（高原ゼミ）



木村 博文
地域経済学科2年
室蘭栄高校出身

活力ある商店街の復活を目指して

今回の地域研修は、4泊5日の日程で道東の訓子府町に行ってきました。地域研修のテーマとして、『訓子府町の商店街を活性化するための基礎調査』をすることが目的でした。調査場所は、町内のスーパー前や町内の各世帯、農村などさまざまな場所に足を運んでアンケートを取ってきました。商店街に対する意見として、商品の値段が高い、品揃えが少ないなど全体的に否定的な考えを持つ人が多かったように思いました。しかし、否定的な考えの人の中でも商店街に対する思いが非常に強い人や、商店街の衰退は非常に寂しいという人もたくさんいました。これからは町全体が一枚岩となって、商店街活性化に力を入れ、大型店舗に負けないサービスを展開していかなければ、商店街の衰退は避けられません。これからの訓子府町の商店街活性化の活動に注目していきたいと思えます。



高齢者にアンケート調査を実施したゲートボール場の風景



じゃがいも工場の様子



最終日に行った知床の海



バスで訓子府町に到着（初日）

旧訓子府駅

幼稚園前での聞き取り調査風景

中心商店街の様子



西本 亜美
地域経済学科3年
札幌清田高校出身

町全体の活性化を目指す訓子府

訓子府町は本当に廃れている。実際に調査に訪れる前に言われていました。その通りで人通りはほとんど無く生き活きとした様子はありませんでした。私たちはどうしたらこの街を活性化できるか？というテーマの元に商工会の方からヒアリングをし、一般消費者、店主、高齢者の3種類のアンケート調査を行いました。一般消費者用のアンケートでは中心市街地だけではなく、農村部に住む方々たちの所や北見市に近い所に住む人の所にも訪れました。ふるさと銀河線の廃止によって周辺地域から訓子府へと訪れる人が減少しただけではなく、町民の活性化への意識も薄れてきているように感じました。しかし中には活性化を望んでいる声も多くあり、協力するという方もたくさんいました。これから隣の北見市に負けない町づくりをしていって欲しいと思います。

◆ 研修地——訓子府町



訓子府商工会でのヒアリングの様子



菊池一春町長を囲んで役場前にて



いざ調査へ向かおう!



合宿最終日に訓子府駅跡で打ち上げBBQ

学生研修記 (水野谷ゼミ)



酒井 雄樹
地域経済学科3年
岩見沢西高校出身

商店街の未来のために

私達、水野谷ゼミの地域研修ではゼミのテーマである、地方商店街の活性化をもとに、4泊5日で訓子府町とウトロに行きました。訓子府町では、事前で作っていたアンケートに回答していただきました。アンケート結果をみると、消費者は衰退傾向にある商店街をなんとか利用して活気を取り戻したいのだが、値段や品揃えを比べるとどうしても、北見に行ってまとめて買ったほうが良いという感じでした。しかし、このまま商店街が衰退し、買いたいものが買えないような状況になってしまうかもしれないので、目先のことを考えずに、少しでも商店街で買い物をするようにしたら良いのではという結論に至りました。最終日にはウトロに行き、地元漁師の遠藤さんから、知床に生息するサケ科魚種の新しい価値を見出す活動について貴重な話も聞け、とても充実した5日間でした。



左右とも/ゲートボール場での聞き取り調査



左右とも/スーパー前での聞き取り調査風景



旧訓子府駅前にて



訓子府町農林商工課による講演会



寝る前に明日の調査準備



佐藤 大地
地域経済学科2年
札幌新川高校出身

商店街に元気を!

水野谷ゼミの今年の研究テーマは「地方商店街の実態調査」でした。研修先は道東の訓子府町という町。「人口減少や購買力の低下で悩むこの商店街に再び力を取り戻すことはできないか?」とゼミ生みんなで知恵を絞って、問題解決の為になにが必要なのかということを知るための調査票を作りました。その調査票を持っていざ、出発! 地元の人に聞き込みを始めました。その調査でわかった事は、北見にあるイトーヨーカドーなどの大型小売店の影響で、「買い物が一度で済むから」、「そっちのほうが品揃えも豊富で安いから」などの理由で町内の購買力が低下していることでした。町内の店主の意見を聞くと、まちづくりに必ずしも協力的ではない人もいることがわかり、店・消費者・行政の全員の協力がないと商店街に再び力を取り戻すことは難しいということがわかりました。

平野 研ゼミⅠ

HIRANO KEN Seminar I
○参加学生数 14名

札幌市内のフェアトレード商品取扱店調査

◆ 研修地——札幌市



平野 研
地域経済学科
講師

研修期間・研修先

- 9月8日 フェアトレードショップ「アースカバー」「みんたる」「これからや」、有機・特別栽培野菜専門店「アンの店」
9月9日 開発教育「貿易ゲーム」(北星学園大学・萱野智篤准教授)、ヘナタトゥー講習会(元フェアトレードフェスタ実行委員・細谷悠生さん) 北海学園大学豊平校舎7号館



◆ 研修目的

フェアトレード(以下FT)の知識を深め、身の回りにあるFT商品について知るとともに、日常生活にある「商品」について考えていく。
札幌市内のFT商品取扱店でインタビューを中心としながら、実践的にFTを体感し、貿易について考えていくことを目的とする。

◆ 総括

フェアトレード(以下FT)に関する取り組みは本年度が初めてであった。ゼミ生各自は手探りながら積極的に参加した。

1日目は札幌市内のFT商品取扱店を訪問し、インタビューを行った。FT料理店、道内有機農産物とFT商品の店、そしてFT団体として東ティモールからコーヒーを輸入している店と、特徴のある店を訪問した。各店でFTに対する考え方や、FT商品を取り扱うようになったきっかけなどの貴重な話を聞くことが出来た。夕食では、各

店で購入したFT食品や有機農産物を使いカレーを作った。

2日目は、FT用にアレンジした自由貿易ゲームを行い、先進国と途上国の交易問題についてのワークショップを開いた。また、FTヘナを使ったタトゥー講習会では、お互いの腕などに絵を描き楽しくFTを体験した。

インタビュー項目の検討、FTについての事前学習などの準備不足のため、訪問時に十分に調査できたとは言い難かった。しかし、2日目の講習会ではFTに関する知識や関心を各自が持つことが出来た。研修日程を前後させれば良かったとの反省もあったが、各店への訪問は学祭でのFT模擬店出店や研修後のゼミでの学習に活かされていった。生活の中にある途上国との繋がりについて考えていくきっかけとなった。

学生研修記



伊藤 好一
地域経済学科2年
旭川凌雲高校出身

札幌市でみるフェアトレードの重要性

私たち平野ゼミは札幌市内にあるフェアトレード商品を扱っているお店を訪れて、経営者の方々にお話を聞いてきました。その中でも私が話を聞いて一番興味深かったお店が「アンの店」です。元々は無農薬野菜を販売するお店でした。そして無農薬野菜などの延長線で「体に良いものを突き詰めていくとフェアトレードに辿り着いた」と店主が言っていたように、現在では無農薬野菜と共にフェアトレード商品も店内で数多く見つけることができました。また、どのお店でも経営していく上での苦労や店を始めるきっかけなどの貴重な話を聞くことができたのですが、すべてのお店の方々が口を揃えて「生産者の顔が見える商品売りたい」と言っていました。途上国援助のためだけでなく、最近問題になっている食の安全性という意味でも、フェアトレードは重要だと感じました。



左右とも/みんたる



左右とも/これからや



左右とも/アースカバー



左右とも/アンの店



大口 敦実
地域経済学科2年
札幌新川高校出身

貧困のない社会をつくるためのパートナーシップ

9月8日・9日に地域研修を行いました。1日目は札幌市内のフェアトレードショップを回り各店主の方々に話を伺いました。ゼミを選択した4月の段階では「フェアトレード(FT)」という言葉を知らないゼミ生がほとんどだったのでこの研修で実際にFT商品を見たり、FTについての話を聞くことができたのは知識の少ない私たちとFTの距離を縮めるよい出来事になりました。そのうちの1軒ではネパール料理を頂いたり、自分たちでFT商品を使ってカレーライスを作ったりもしました。2日目は講師の方に学校へ来ていただき、先進国と発展途上国の貿易を手軽に考えることができる貿易ゲームを行いました。また、ヘナを使用して、肌を一時的に染めるアジア伝統芸術のヘナタトゥーの講習を行いました。私たちはFT商品を使って学祭出店もしたのでそれに繋がるよい研修となりました。

平野 研 ゼミⅡ

HIRANO KEN Seminar II
○参加学生数 18名

洞爺湖G8サミットの地域社会への影響 ◆研修地—洞爺湖町・壮瞥町・豊浦町・留寿都村



平野 研
地域経済学科
講師



洞爺湖町役場にて

研修期間・研修先

- 9月16日 洞爺湖町役場、留寿都村役場聞き取り調査、
壮瞥町「旅館かわなみ」「オロフレほととピアザ」聞き取り調査
- 9月17日 壮瞥町役場、豊浦町役場聞き取り調査、
洞爺湖温泉街ホテル・旅館アンケート調査

◆研修目的

2008年7月洞爺湖で開催されたG8サミットによる地域社会への影響について、周辺自治体への調査および洞爺湖温泉街の宿泊施設へのアンケート調査によって明らかにする。サミット開催時の様子を聞き取り調査、そして開催後の経済効果と当地の課題を考察する。

◆総括

地域研修に向けてゼミナールでは、G8サミットの歴史とその意義について事前学習を積み重ね、研修に臨んだ。研修直前の準備としては、サミットに向けた周辺自治体の取り組みについての質問状を送付するとともに、洞爺湖温泉街の宿泊施設にアンケート用紙を送付した。4町村の聞き取り調査とアンケート調査という非常に長時間での調査研修であったため、事前準備が重要であった。

サミット開催後2ヶ月が経っていたため、質問に対して比較的まと

まった形で回答を得ることができた。4町村の対応や影響の相違が明示的であった点も本研修の大きな成果であった。各自治体の共通した取組みとしては環境保全運動があり、問題点としては警備に関する住民への影響があげられた。相違点としては、市民運動への対応、経済効果など様々な事項があげられる。

アンケート調査では、サミット開催時にはほぼ全ての宿泊施設で収益は上昇したが、その後の効果に関しては外交人観光客対応などの点で大きな違いがあることがわかった。また、石油高騰などで観光業の経済効果が当初の期待より小規模であることが伺えた。

本研修で明らかになった道民会議の行政統括的役割について、研修後、改めて調査を行った。また、市民活動についても聞き取り調査を行い、研修での成果をその後の学習へと結びつけていく事ができた。

学生研修記



平井 侑佑

地域経済学科3年
北見柏陽高校出身

いろんな視点からみて

今回北海道開催されるサミットを通じて、現在私達が直面している問題を考えていきました。地域研修の中心は、市民団体、各自治体の話を聞く、洞爺湖温泉街アンケート調査といった市民レベルの情報収集でした。新聞、講演などからも国際レベルの情報収集も行いました。ただメディアが流している情報だけを見るのではなく報道されないことも自分達で調べ、多面的に情報収集することの大切さを感じました。また洞爺湖サミットでは国際的には大きな成果はなかったかもしれませんが、市民間の交流の深まり、サミットに関わった人たちの意識の変化など少なからぬ影響を及ぼしたことを知ることができました。最後に、各自が得た情報をゼミ内で共有することを心がけたため、多角的にサミットについての知識、世界が直面している問題についての知識をゼミ全体で深めることが出来ました。



洞爺湖町役場にて



聞き取り調査 (留寿都村)



G8ピースウォーク



壮瞥町役場にて



留寿都村役場にて



聞き取り調査 (壮瞥町)



豊浦町役場にて



洞爺湖温泉街に宿泊

地域研修を終えて



本田 慎

地域経済学科3年
別海高校出身

私達は今回地域研修で洞爺湖町、壮瞥町、豊浦町、留寿都村の四町村に行ってきました。目的は2008年7月にあった洞爺湖サミットを終えた町村役場の訪問や、街での現地調査です。調査の前に市民団体が開くシンポジウムなどに参加し、サミットについて知識を深めて地域研修に臨みました。実際に訪問してみると役場の方々からサミット前後や当日の活動のことや、活動で大変だったこと、サミット効果など様々なことを聞くことができました。町での現地調査ではホテルの方々からアンケートを行った、実際に話を聞くこともできました。その成果もありとても充実した地域研修になりました。役場の方々やアンケート、質問に答えていただいた方々の協力のおかげです。今後、これらの経験を生かし、これからのサミットに注目し、世界にどう影響を与えていこうかを見ていきたいと思います。

古林

英一 ゼミ I

FURUBAYASHI Eiichi Seminar I
○参加学生数 13名

サケの生産・加工に関する体験学習

◆ 研修地—— 標津町



古林 英一
地域経済学科
教授

研修期間・研修先

9月17日 標津町サーモン科学館
9月18日 神内商店 (水産加工実習)
標津町サーモン科学館 (人工授精実習等)
9月19日 体験乗船



◆ 研修目的

水産業、とりわけサケ漁業は北海道の重要な地場産業である。このサケ漁業の生産から加工・流通までを体験・見学することで当該産業を理解することが目的である。

◆ 総括

サケ漁業は「つくる漁業」の優等生ともいわれ、人工授精からはじまり、安定した漁獲量を維持し続けているが、単に漁獲量が安定しているだけでなく、最近では「食の安心・安全」を実現する試みが行われている。本研修では生産(漁獲)から加工・流通に至るまで一貫した衛生管理システムである地域 HACCP を導入した標津町を訪問

し、漁船への体験乗船や加工場での加工実習、サーモン科学館での人工授精実習などを行った。実際に体を動かして体験することで、単なる知識としてではなく、身をもって産業の現場と苦勞を多少なりとも理解できたと思われる。

学生研修記



能登 一徳

地域経済学科2年
札幌手稲高校出身

道東標津町、漁業と共に生きる町

私達古林ゼミ I は二泊三日で道東の標津町へ行ってきました。朝早く学園前に集合すると、約8時間バスに揺られ目的地の標津町に到着しました。現地では科学館を見学し、講義を受け、今まで知らなかったサケの生態について詳しく教えていただきました。次の日は深夜から早朝にかけて実際に漁船に乗せてもらいサケの水揚げを目の前で見ることができました。船の上はとても風が気持ち良く帰港する頃にはすっかり漁師さんの仲間になった気分でした。標津町は町独自の取り組みである地域 HACCP (ハサップ) というものを実施していて食の安全に真剣に向き合っていて、町が一丸となって取り組む姿はとてもすごい事だと思いました。私達が普段から食べているものがどの様に手元へ来るのかとも考えさせられました。



加工場



加工場

地域研修を終えて

今回、私達はサケの生産・加工について学ぶため標津町に行きました。1日目、標津町にあるサーモン科学館で講師の方に標津町におけるサケの生産、加工、流通、地域 HACCP について教えていただきました。標津町の地域 HACCP の仕組み、なぜ標津町が地域 HACCP を取り入れるようになったのかなどを学びました。2日目はセリ場見学、水産加工実習、サケ人工授精実習、サケの遡上見学を行いました。水産加工実習先である神内商店さんの加工作業場では、万全の衛生管理がなされており、消費者に安心して食べていただくためにここまでしているのかという驚きと共に、地域 HACCP のすごさを感じました。3日目は早朝2時30分から漁船に乗せてもらい、さらにお手伝いまでさせていただきました。とても貴重な体験ができて本当に良かったです。



喜島 浩司

地域経済学科2年
釧路北陽高校出身

古林

英一 ゼミⅡ

FURUBAYASHI Eiichi Seminar II
○参加学生数 13名



古林 英一
地域経済学科
教授

軽種馬の生産施設における体験学習 ◆ 研修地—北海道日高支庁管内

研修期間・研修先

9月10日 北海道軽種馬農業協同組合・北海道市場、高村牧場

9月11日 日本中央競馬会日高育成牧場・ライディングヒル静内



JRA日高育成牧場にて

◆ 研修目的

サラブレッドの生産・育成は北海道日高地区の重要な産業である。本研修においてはサラブレッドの生産・育成・流通の諸段階を体験・見学し、当該産業の理解を深めることが目的である。

◆ 総括

わが国のサラブレッド生産は家族労作的な生産牧場が中心となっている。様似町内のサラブレッドの生産牧場において、サラブレッドの日常的な飼養管理を実際に体験し、日本中央競馬会日高育成牧場において高度な科学的育成の現場を見学した。さらに乗馬センターにおいて乗馬の実習をおこなった。

本研修を通じて、馬に初めて触れた学生がほとんどであり、華やかな競馬場でのレースを支えるために、数多くの主体が多大な労働が投入されており、それらが地域産業として成立していることを理解できたと思われる。

学生研修記



佐々木 悠希

地域経済学科3年
札幌国際情報高校出身

地域研修を終えて

私たち、古林ゼミナールⅡは9月10日～11日にかけて、日高地方の馬産関連施設の見学に行きました。1日目、北海道市場の見学や、高村牧場で馬小屋の掃除や馬をシャンプーするなど、ゼミ生全員で馬の世話をしました。2日目は、日高育成牧場、JBBA 種馬場の見学、ライディングヒル静内で乗馬体験をしました。日高育成牧場は、私たちがよく目にする競馬用トラックやとても広い室内練習場など、設備が充実していました。種馬場にはあまり競馬を知らない私でも一度は聞いたことある有名な馬が種馬として生活していました。乗馬体験では、ゼミ生で乗馬経験者はいなかったのですが、15分くらいレクチャーしてもらくと、ゼミ生のほとんどが自分で馬を歩かせられるようになりました。この研修で、普段経験できない貴重な体験ができ、とても充実した研修になりました。



作業体験



乗馬体験



作業体験



松木 道人

地域経済学科3年
斜里高校出身

地域研修を通じて

僕たち古林ゼミⅡの地域研修で訪れたのは北海道市場、高村牧場、JRA 日高育成牧場、ライディングヒル静内、JBBA 静内種馬場でした。僕が特に心に残ったのは高村さんご夫妻が経営している高村牧場で、そこでは馬の世話を体験させてもらい、その内容は馬の放牧、馬小屋の掃除、馬のボディーウォッシュです。特にボディーウォッシュでは、僕たちがやると嫌がるそぶりを見せるのに、高村さんがやると気持ちよさそうにしていました。最初は技術の差かなとも思ったのですが、高村さんが馬に話しかけながら洗うのを見てそれだけではないなと感じました。今回の研修で気づいたことは研修先すべての方が馬と一緒にいるときに笑顔で接していたことです。馬と人がつながっているこれらの仕事は辛いこともたくさんあるだろうけれど、その分喜びもたくさんあってやりがいがありそうだなと感じました。

水野 邦彦

ゼミ I・II

MIZUNO Kunihiko Seminar I・II
○参加学生数 11名



水野 邦彦
地域経済学科
教授

研修期間・研修先

8月30日 沼田町ふるさと資料館、ホロピリ湖畔、一乗寺

8月31日 鷹泊(墓標)



ホロシリ湖畔の研修一行

◆ 研修目的

北海道における朝鮮人労働者の実態を知る研修として、2008年 は、沼田町にかつてあった浅野雨竜炭鉱の跡地を訪れ、この地の住民であった橋場守さん、旧留萌鉄道機関補助員であった春山藤一郎さんから、浅野炭鉱とその奥の昭和炭鉱について学ぶ。

◆ 総括

研修ではまず、炭鉱の物品を数多く展示している沼田町ふるさと資料館の一角で、橋場さんと春山さんのお話をうかがったが、みずから経験された事柄についてのおふたりのお話は臨場感と実感がこもっており、学生にとって刺激的な内容であった。1939年以降強制連行された朝鮮人は、判明しているだけで、浅野に962人(うち56人が死亡)、昭和に630人(うち23人が死亡)いたという。浅野の集落はいまホロピリ湖底に沈んでいるが、研修一行は浅野跡地が一望でき

る高台に行き、おふたりや、同行くださった多度志・一乗寺の殿平真副住職、拓殖大学北海道短期大学の橋本信教授に、さらにご説明いただいた。一乗寺では、ビデオ「雨竜の祈り」上映ののち、学生の質問に答えるかたちで春山さんからさらに踏みこんだお話をうかがった。

翌日は「雨竜の祈り」の舞台である鷹泊の遺骨発掘現場に行き、けっして豪華とはいえない木版の墓標をまえに、殿平副住職の読経とゼミ学生の献花とともに、朝鮮人2名・日本人2名・身元不明者1名の冥福を祈った。朝鮮人・中国人をふくむ北海道での強制労働については『笹の墓標』や『穴から穴へ13年』などにもしるされているが、学生たちは現地を訪れ、当時を知る方々のお話をうかがい、より実感をもって労働者の過酷な生活を思い描くことができたであろう。

学生研修記



鈴木 佳直
経済学科2年
北海高校出身

おそるべき「タコ部屋労働」

かつて北海道で強制労働がおこなわれていたことを僕は中学校の社会科の授業で聞いていたはずだが、その労働者が人間扱いされず、いつ死んでもおかしくない生活を強いられていたことを研修で学び、衝撃を受けた。その典型がタコ部屋労働で、これは囚人労働に代わり炭鉱などで実施された過酷な拘禁労働である。好条件の仕事と誘われ、現場に着く前に豪勢に飲み食いするが、翌朝には飲食代として高額の借金を背負わされ、働かざるを得ない状況がつけられる。十分な食事もなく早朝から夜まで身体を酷使するため、病死者は続出するし、たとえ棒頭という監視役の目をくぐって脱走しても、みつけだされてリンチを受けるか、山中で遭難する人が多かったそうだ。こういう過去のうえに今日の北海道があるのかと思うとぞっとしてしまう。



当時の石炭(資料館)



当時の写真(資料館)



一乗寺で西瓜をいただく



春山さんと橋本教授



これからカメラを体験



往時の蒸気機関車のまえで



夕食後の殿平副住職との懇談



見学の中で

朝鮮人炭鉱犠牲者と鷹泊の木標



和田 梓
地域経済学科3年
枝幸高校出身

ふるさと資料館で私たちは炭鉱の様子や強制労働の朝鮮人たちのことを知る方々からお話を聞いた。炭坑内にメタンガスが発生すると作業を中止する規則があったが、時給制の労働者は給料が減っては困るので、ガス測定者に数値をごまかしてもらったことが多かったという。そのせいかガス爆発や、石炭の粉による炭塵爆発がしばしば起こったそうだ。

一乗寺でみたビデオの内容は、強制労働の末に死亡した朝鮮人を埋めたという日本人の告白を受け、住職や地元住民が協力して、大雨のなか遺骨を発掘した記録であった。その発掘現場を訪れると、5本の木標(木の墓標)が建てられており、当時の埋火葬認許証を頼りに調べたという氏名・出身地・死因などがしるされていた。同じ過ちをくりかえさないことを肝に銘じつつ、私たちは花を供えた。

山田 誠治 ゼミ I

YAMADA Seiji Seminar I
○参加学生数 11名

函館の地域メディアの現状を知る

◆ 研修地 ― 函館市



山田 誠治
地域経済学科
教授

研修期間・研修先

11月6日 函館市地域交流まちづくりセンターで、まちづくりの情報発信について学習

11月7日 株式会社ニューメディア函館センターで解説
NHK 函館放送局で『どんと道南』出演



NCVセンタースタジオで「出演」中の山田ゼミ生

◆ 研修目的

函館のまちづくりと地域メディアというテーマで、函館の地域を理解し、情報を発信する地域密着のメディアの特徴やその在り方について、現場の実情について直接話を聞き、地域を伝えるとはどういうことか、を学ぶ。

◆ 総括

函館という、特徴的な歴史があり、その街に対する愛着をもった人たちが、どう地域の情報を発信しているか、それぞれの現場から学ぶことができたと思う。

また、大手のメディアとは異なり、発信する側も、それを受信する側も、それぞれ近い距離の中で、だから故に様々な工夫をしながら、それぞれのメディアの特性を生かして取り組んでいる地域メディア実態について、学習できたのではないだろうか。

「情熱」というキーワードがふさわしいように、まちづくりセンター館長の丸藤さん、函館ニューメディアセンターの放送部藤本さん、そしてNHK函館のアナウンサー志摩さん、と、どなたも函館にこだわり、地域を元気にする、という目的のために、それぞれのメディアから積極的に発信をしていた。その現場から、しかも地域のメディアということで、分業化が進んだ大手とは異なった仕事ぶりに直接触れることができたのは、学生にとって、メディアの発信源の人間の思いを感じることができ、何を伝えるかの原点を確かめることができたと思う。

函館というローケーションの良さもあり、学生同士のコミュニケーションが深まった、という意味でも、意義のある研修であった。

学生研修記



佐々木 賢治
地域経済学科3年
北海道出身

地域の情報発信を支えるのは、地域メディアへの情熱

私が今回の研修で学んだのは、函館市地域交流まちづくりセンターの館長丸藤さんからの話でした。このセンターは、指定管理者制度のもとで運営されており、「函館のまちづくり」についての拠点の一つです。旧丸井今井の由緒ある建物の中にあり、いわゆる行政機構とは異なった「柔らかさ」と、逆に財政的な苦しさについての解説を聞き、丸藤さんのまちづくりの情報発信に対する情熱にうたれました。

また、NHK 函館の木曜午後の生放送『どんと道南』にも出演しました。番組は函館放送局のホールをセットとして使い、いろんな人がオープンに行きかう中での放送にはびっくりし、この近さもこうしたメディアの特徴かな、と感心し、司会者の志摩さんの熱心さも含め、手づくりのメディアの良さを実感しました。



NHK函館『どんと道南』の生放送



旧丸井今井建物のまちづくりセンター



熱く語るまちづくりセンターの丸藤さん



郊外に立地している新しい建物のNCVニューメディア函館センター

小さなメディアの特徴にあらためて感心



富樫 薫
地域経済学科2年
札幌第一高校出身

私は、函館のケーブルテレビ局である株式会社ニューメディア函館センターが印象に残りました。ケーブルテレビ局という特性からか、函館郊外に立地しており、綺麗な建物からは、数多くの番組が発信されるとともに、地域密着の番組づくりの取り組みについても解説を受けました。地元の小学校の催しの番組を制作したり、地域の情報を伝え、コミュニティチャンネルがしっかり位置づいているのに感心しました。その番組制作も、そもそも少人数のスタッフと予算も限られた中、それぞれの職員の方が担っており、ある意味働きがいがあるような印象を受けました。

ゼミの友人たちとも交流でき、いろいろな意味で個性を感じることができた研修でした。

山田 誠治 ゼミⅡ

YAMADA Seiji Seminar II
○参加学生数 13名

沖縄の地域メディアを実体験する ◆ 研修地—糸満市・浦添市・那覇市



山田 誠治
地域経済学科
教授

研修期間・研修先

10月28日『沖縄県平和祈念館』訪問、糸満市『FMたまん』訪問・番組に出演
10月29日 浦添市『FM21』訪問、那覇市『FMレキオ』訪問・番組に出演
10月30日 那覇市『琉球新報博物館』訪問
10月31日 自由行動



FMレキオスタジオにて

◆ 研修目的

ゼミで研究をしてきた地域メディアの特徴について、地域的な特性を反映し、活気溢れる取り組みをしている沖縄のコミュニティ放送、ならびに地方紙の特徴・独自性について学習することを研修の目的とした。

◆ 総括

今回の研修では、沖縄という自然・歴史の環境においても、また戦争と平和についても非常に特徴的な地域を訪問し、その土地の「空気」とそれが地域メディアに十分反映していることを学生は体験できたと思う。

地域メディアは、いわゆる大手のメディアと比べ、規模も資金力もまた技術の面でも、運営の環境は大きく異なる。しかし、それはただ不利であるということではなく、「手づくり」のメディアの斬新

さ、ある意味での「面倒さ」「とっつきにくさ」の良さ、しかし、地域メディアを担う人たちの熱意やその意義について体感できたのではないだろうか。

地域の人たちが民謡・歌謡曲や自分が得意な分野を「表現しよう」ということで番組を持ち寄り、百人を超えるDJを抱えている浦添市のFM21、若くて生き生きとした女性DJが、子育て生活のことなどを伝え続ける那覇市のFMレキオ、そして、糸満市のことならなんでも伝えよう、とある意味破天荒な放送をしているFMたまん。同じ沖縄の中でもそれぞれに特徴を持ったコミュニティFM放送局を訪ね、わずかな時間であったがスタジオに生で出演し、私たちの北海道と地元沖縄の人たちとの交流だけでも、「地域」を感じることができ、それを実体験できたのではないだろうか。

学生研修記



齋藤 俊生
地域経済学科3年
札幌白石高校出身

強烈な個性を体験させられた糸満市のコミュニティ放送局『FMたまん』

私がこの研修で最初に強く感じたのは、ホテルの係りの担当の人たちの対応ぶりや飲食店の雰囲気など、沖縄の人たちの「人懐っこさ」「やさしさ」、この土地の温かさでした。

そして、その雰囲気も含め、「地域を伝える」熱意を感じたのが、『FMたまん』の創設者照屋さんのお話でした。既存のメディアの在り方とは異なり、糸満市という地域のためのラジオを自らの手で創りあげてきた姿勢と方針は、まさに地域メディアそのものでした。また、スタジオの中の、目の前で演奏される三線を聴けたのは、貴重な体験でした。

今後は、リスナーの幅を広げ、若い世代もどう取り込めるのか、など課題も感じましたが、ネットで配信するなど、あたらしい技術も取り入れ、積極的な取り組みにも感心しました。



活気のあるFM21スタジオ



情熱的なFMたまんの照屋さんを囲んで



FMレキオの生放送で北海道を紹介



琉球新聞博物館で、沖縄戦と報道について学ぶ



FMたまんでの三線の生ライブ放送



大島 涼介
地域経済学科3年
札幌清田高校出身

沖縄の人たちにとっての沖縄戦の現実とその歴史を知った

私がこの研修で最も強く感じたのは、最初に見学した沖縄平和祈念館です。沖縄戦の悲劇についての事実が再現され、その映像・写真・資料に心を打たれました。本当に、こんな現実があったんだということ、そして、悲劇の事実を知り、館の見学を終えた出口から見た青く澄んだ美しい海。これらを前に、ある友人が「こんなきれいな海なのに、素直に見ることができない」と口にしたことが印象に残っています。琉球新報博物館では、その沖縄の人たちの立場にたった報道についての展示を見学し、あらためて地域に根ざしたメディアとは何か、実感させられました。

FMレキオでは、子育てをしながら語るDJさんの生放送中にスタジオに入れてもらい、「若く」「活気がある」放送を体感することができ、この地域に根ざした力を感じたような気がします。

高原ゼミ・水野谷ゼミ合同地域研修

現地報告会 2009年2月23日 訓子府町

高原ゼミ・水野谷ゼミでは現地を再び訪れて、「地域研修」の成果として、報告会を実施した。現地報告会に参加した佐々木敬一君と山下壘君に、今年度地域研修の取り組みについて感想を語ってもらった。



佐々木 敬一 君
地域経済学科3年 高原ゼミⅡ



山下 壘 君
地域経済学科3年 水野谷ゼミⅡ

僕は日高地方の様似町の出身なのですが、大学受験時の大学選びに地域経済学科の地域研修のことを知り、地方のことが学べる面白い取り組みだと興味を持ち入学しました。2年時の地域研修は、3年生と調査の分担などを行ったのですが、お互いの調査に実感が持てなかった反省点などを生かし、今年は地域調査の方法に工夫しました。

現地ではヒアリングとアンケート調査の両方を行い、朝9時から晩まで毎日歩きっぱなしで大変でしたが、思いを必死に伝えると答えてくれる人たちが多く、手応えを感じました。地域研修はいろんな方面からみた意見、多角的な見方ができるんじゃないかと感じました。

2月に行った現地報告会では、役場の人たちからは「ふだん町民に聞いても、なかなか率直な意見が出てこないけど、調査には深い意見が出ていて良かったよ。今後、具体的な意見や提案を是非聞きたい。」と求められました。

今年の夏休みには、その宿題に答えるために4年生のゼミで訓子府町を訪ねる予定です。就職など進路のことも含め、これからも、地域に密着した何かに関わって行ければと考えています。

●訓子府町くるネッ(旧ふるさと銀河線訓子府駅)での現地報告会の様子



訓子府はいい町でした!コンビニでも声をかけてくれます。調査でも、気付いたら1時間以上も話してくれる人たちもいて。とにかくしゃべりました。2月の現地報告会はとても緊張しましたが、町長さんには、いい機会だからと励まされました。このような機会が多いと、やったことが生かされると思います。

水野谷ゼミは、2年生との合同ゼミなので、2、3年生の連帯、チームワークを大事に考えています。大変なことをやりたい、忙しいところでやりたいとゼミを履修しましたが、厳しいけれど楽しい!

水野谷ゼミはインゼミ(日本学生経済ゼミナール大会:通称インゼミ)にも参加しているので、そちらへの参加準備も大変でした。地域研修のアンケートを集計、論文にまとめてインゼミで発表しましたが、地域の現状を知らないような本州の他大学生とも議論する機会に恵まれ、とても刺激になりました。

ゼミ同士の交流が生まれたのも地域研修のおかげです。高原ゼミの報告書はすごい!とても参考になりました。

将来は、いろいろな町を見てみたい。小さな町とかに行ける機会があればいい。訓子府町に行かなければ、そういう気持ちにならなかったでしょう。就職先とか、ずっと先の話ですが老後とか住んでみたい、そう思いました。



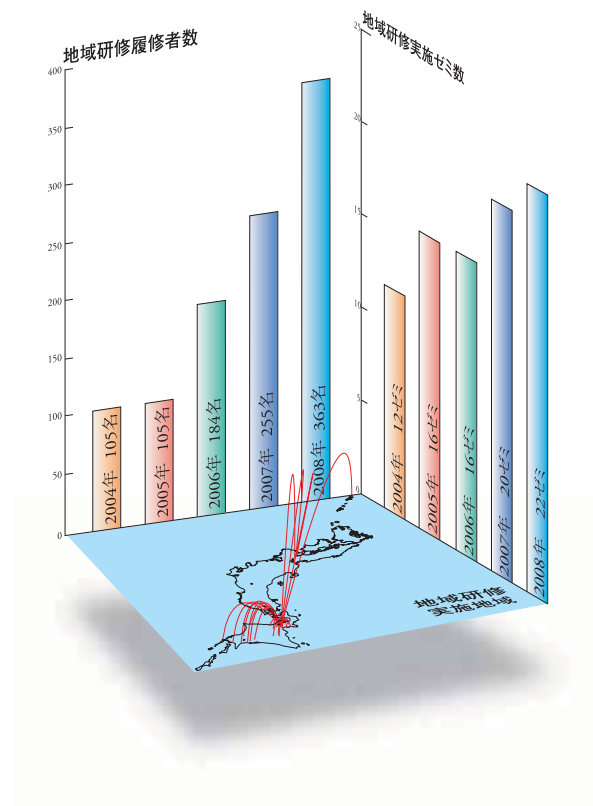
●現地報告会が取りあげられた北海道新聞オホーツク版の紙面(2009.2.25.)

地域研修報告書

2008

平成20年度

私立大学教育研究高度化推進特別補助採択事業



北海学園大学 経済学部

[経済学科・地域経済学科]

●お問い合わせは●

経済学部

TEL: (011) 841-1161 (内線2222)

<http://www.hokkai-s-u.ac.jp>

<http://www.econ-hgu.jp>

制作: (株)ラボット

発行: 2009年3月